

東海大学 教育開発研究センター紀要

第5号 2020

目次

研究ノート

学習者の「資質・能力を活用する」英語授業デザインの構築
ー教科横断的カリキュラムとライティング指導の視点からー

伊東弥香 1

東海大学教育開発研究センター2020年度活動報告

成川忠之・及川義道・馬場弘臣・安森偉郎・園田由紀子・林大仁・佐藤直也・松本隆・林葉子 21

東海大学教育開発研究センター 規程

東海大学教育開発研究センター紀要・研究資料集執筆要項

学習者の「資質・能力を活用する」英語授業デザインの構築 —教科横断的カリキュラムとライティング指導の視点から—

伊東 弥香*

国際教育センター

概要

本稿の目的は、学習者の「資質・能力を活用する」英語授業デザイン構築のための理論と実践を検討することである。具体的には、(1) 一貫性に位置付ける学校英語（小・中・高）から、さらに(2) 「アカデミック英語（English for Academic Purposes; EAP）」 「特定の目的のための英語（English for Specific Purposes: ESP）」（大学）へとつなげるための英語授業のあり方に焦点をあてる。

新しい学習指導要領で示されるように、日本の学校教育は「コンピテンシー・ベース（資質・能力中心）」の学力観によるカリキュラムへと舵を切った。さらに、2020年度教育改革において、高校・大学入試・大学が三位一体となって取り組む「高大接続改革」が進められ、小・中・高で育成する「学力の3要素」の伸長を大学で図ることになった。このことは、大学という文脈においても、初等・中等教育の制度化されたカリキュラムによって育まれた学習者の資質・能力を伸ばすための授業デザイン構築が求められていることを意味している。本稿では、学習指導要領の改訂キーワードとなっている「探求的な学習」「教科横断的カリキュラム・マネジメント」に着目し、筆者の大学授業におけるライティング指導の視点から、教養科目・基礎専門科目との横断的カリキュラムを「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals; SDGs）」と「内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning: CLIL）」を融合するアプローチとともに考える。

*東海大学国際教育センター

1. はじめに

本稿の目的は、小～大学までの一貫性英語教育のための授業デザイン構築に関する研究の一環として、学習者の「資質・能力を活用する」ための理論と実践を検討し、今後の示唆を得ることである。文部科学省の新しい『学習指導要領（The Course of Study）』で示されるように、日本の学校教育は「コンピテンシー・ベース（資質・能力中心）」の学力観によるカリキュラムへと舵を切った。学習指導要領は、文科省・初等中等教育局教育課程課が告示する教育課程の基準であり、学校教育法施行規則の規定を根拠として、小学校、中学校、中等教育学校、高等学校、特別支援学校の各学校と各教科で実際に教えられる内容とその詳細を定めた文書である（伊東 2010: 23）。学習指導要領で定められた内容を知ることは、小・中・高の教育現場だけでなく、大学の英語授業デザイン構築にとっても重要である。

本稿では、小学校から大学をつなぐ英語教育の視座に立ち、筆者の2020年度春学期の英語ライティング指導の実践を紹介しながら、新しい学習指導要領の改訂ポイントとの連携をふまえた今後の方向性について検討する。学習指導要領の改訂キーワードである「探求的な学習」「教科横断的カリキュラム・マネジメント」を大学の英語授業で実践するには、教養科目・基礎専門科目との横断的カリキュラムが必要となる。学習者の「資質・能力を活用する」英語教育（Competency-based EAP/ESP English education）の可能性と方法を探る。

2. 学習指導要領の改訂

新しい学習指導要領は「資質・能力の育成」と「社会に開かれた教育課程の実現」を目指し、「教科内容を学ぶための資質・能力育成のための学力観と学習論の一体化」（資質・能力中心、コンピテンシー・ベース）が特徴である（伊東 2020a 96-97）。資質・能力とは「対象が変わっても機能することが望ましい心の働き」（国立教育政策研究所 2016: 34）であり、内容（知識）知よりも方法知に近く、教科等を横断する汎用性の高いものである。言い換えると、「資質・能力を使うためには、それらを働かせて学ぶための教科等の内容が充実している必要」（国立教育政策研究所 2016: 108）がある。新しい学習指導要領では、資質・能力の3本柱を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を定義づけて、これら学力3要素の育成を目指している。また、今回の改訂キーワードの1つが「教科横断的カリキュラム・マネジメント」である。

2.1 教科横断的カリキュラム・マネジメント

小・中・高の学習指導要領の改訂は、大学入学共通テスト（以下、共通テスト）の導入とともに、2020年度教育改革の柱であった。小学校（2017/平成29年改訂、2020年度全面実施）、中学校（2017/平成29年改訂、2021年度全面実施）、高等学校（2018/平成30年改訂、2022

年度年次進行で実施) というスケジュールで進められてきた。また、新しい学習指導要領によって、小学校英語の教科化(第5・6学年対象)という英語教育にとって大きな転換をもたらしている。

今回の改訂の基本的な考え方は、「生きる力(知・徳・体)」の学力三要素を総合的にとらえて再整理し、構造化することにより、全ての教科において「三つの柱」を育成すべき資質・能力と定めている(文部科学省 2017a; 2017b; 2017c)。

①知識・技能(何を理解しているか、何ができるか)

②思考力・判断力・表現力等(理解していること・できることをどう使うか)

③学びに向かう力・人間性等(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)

これら育成すべき資質・能力のために小・中学校と高等学校で求められているのが、「カリキュラム・マネジメント」の確立である。

[小・中学校および高等学校 改訂のポイント]

教科等の目標や内容を見渡し、特に学習の基盤となる資質・能力(言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等)や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実する必要。また、「主体的・対話的で深い学び」の充実には単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で、習得・活用・探究のバランスを工夫することが重要(下線はオリジナル)(文部科学省 2017d; 2017e)。

さらに、カリキュラム・マネジメントの確立において重要なのが、「探求的な学習(inquiry-based learning)」である。探求的な学習とは、自ら課題を設定し、情報収集を行い、整理・分析を通して思考し、判断やまとめを表現するという一連の学習活動のことである。探求的な学習をスパイラルに繰り返しながら、教科学力と「汎用的能力(general capabilities)」を身につけることが期待される(伊東 2020b: 18)。高等学校では、新学習指導要領のもと、2022(令和4)年度より「総合的な探求の時間」が年次進行で導入予定である。

[高等学校・総合的な探求の時間: 改訂の要点]

- ・ 総合的な探究の時間の目標は、「探究の見方・考え方」を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目指すものであることを明確化した(下線は筆者)(文部科学省 2018a: 7)。

2.2 英語科における「探求的な学習」

新しい学習指導要領は、どのような言語能力の育成を求めているのか。下記の外国語科の目標や、その解説が示すように、日本の小・中・高の教育現場では、外国語でコミュニケーション

ンを図る資質・能力の育成を目指す。しかし、外国語（目標言語）の4技能（聞く・話す・読む・書く）の習得が主な目的であり、「道具的イデオロギー」（佐藤 2009）によって実用英語のための技能習得に偏ってきた日本の外国語・英語教育のあり方の流れを踏襲するものであると筆者は危惧している。

[小学校・外国語科：目標]

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す(下線は筆者) (文部科学省 2017f: 67)。

[中学校・外国語科：目標]

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す(下線は筆者) (文部科学省 2017g: 17)。

[高等学校・外国語科：目標]

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す(下線は筆者) (文部科学省 2018b: 12)。

南 (2020) の指摘も示唆的である。南は、今回の改訂ポイントを教科全体、外国語科、国語科における「言語」の扱いから考察し、「道具としてのことば」、あるいはコミュニケーションを単なる「ことばのやりとり」としてとらえていることに対して、「対象としてのことば」を国際理解教育に組み入れた言語教育の重要性を提案している。

しかし一方で、今回の学習指導要領の改訂キーワード「教科横断的なカリキュラム」と「探求的な学習」を授業デザインに取り入れることで、日本の外国語・英語教育に新たな方向性が生まれるという期待を筆者は持っている。それを可能にするのが「持続可能性 (sustainability)」という視点であり、英語授業で「内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning: CLIL)」の枠組みを用いて、英語教育と「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」を融合するアプローチを用いることである (伊東 2020b)。

CLIL は EU 加盟国の多くが用いている学習方法である。ヨーロッパにおける外国語学習者の習得状況・評価を示すガイドラインである CEFR を支える学習者中心の理念に基づき、「文化間/異文化コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence; ICC)」に着目した早期外国語教育の指導法の一つとして、小学校の教師によって用いられるのが基本となってきた (伊東 2019: 18)。言語教育の視点だけではなく、各教科内容の指導の観点を併せて、学

習者の認知や意欲に働きかけ、自律性を育てて、学習者を成長させることを CLIL は目的としている。「教科内容 (content)」と「言語 (language)」の両方を学ぶ CLIL アプローチでは、「4 つの C」を有機的・総合的に結びつけて授業を組み立てることによって。学習者は内容 (Content) やトピックについて思考 (Cognition)」し、言語の知識習得・運用 (Communication) を育成する。協学・文化 (Community/Culture)」によって、思考は活性化される。CLIL では、1999 年改訂版「ブルーム分類学 (Bloom Taxonomy)」(改訂版タキシノミー) (Anderson and Krathwohl 2001) の 6 つの認知領域の知見が取り入れられている。

CLIL の授業デザインにおいては、いかに考えさせるかを意識し、内容を出発点として、それを「目標言語」で学ぶ授業が展開される。日本の教育現場で「英語」で学ぶ授業を行うためには、学習者に適した内容の選択が重要であり、SDGs がその内容となりうる。SDGs は 2016 年から 2030 年までに世界が取り組むべき国際目標である。学習者は、SDGs を知り、お互いの学び合いの中で世界の現状や課題について考え、自分のこととしてとらえて、その解決に向けて自分から行動を起こす力を身に付ける。CLIL の枠組みを用いて、英語 (目標言語) と SDGs (内容) を融合するアプローチは、英語科と他教科をつなぎ、探求的な学習によって「ジブンゴト化」する学びのプロセスを創出するのである。このことは、バイラム (2015) が主張する「外国語学習の特有の役割」、つまり、学習者が自己中心性を脱して複数の視点をとる、当たり前のこととされていることに疑問を投げかける客観的・批判的な思考力を身につける、自律的行動を促す可能性をもたらす (伊東 2018)。

2.3 大学文脈への発展

新しい学習指導要領のもと、小・中・高では教科横断的カリキュラムによって探求的な学習が進められる。大学の教育現場において、この学習指導要領で学んだ児童・生徒が入学し、英語の授業に直接影響を与えるには、しばらく年月を要するであろう。例えば、高等学校においては、2022 (令和 4) 年度から年次進行で実施されるため、2006 (平成 18) 年度生まれが 18 歳になる 2025 (令和 7) 年度が最短という計算になるからである。しかし、2020 年度の大学入試改革における「高大接続改革」(文部科学省 2019) や、小・中・高の教員養成という使命の点からも、今回の改訂による教育内容の変化をきちんと理解した上で、大学文脈での授業デザイン構築が進められるべきである。大学の英語教育の視点から、英語と他科目との連携が重要であり、初等・中等から一貫した英語教育を確立することに意味・意義がある。

松尾 (松尾 2016: 16-17) によれば、教師はカリキュラムのデザイナーであり、学びの経験のデザイナーである。しかしながら、「カリキュラム」という概念は多義にわたり、学校教育において展開されるレベルには 4 つがある。

- ① 制度化されるカリキュラム (学習指導要領)
- ② 計画されるカリキュラム (学校の年間指導計画)
- ③ 実践されるカリキュラム (教師による授業)

④経験されるカリキュラム（子どもの経験・受容）

この考えに従えば、探究的な学習による学びのプロセスは、学習指導要領という制度化されるカリキュラムに位置付けられるが、高等学校の「総合的な探求の時間」を含め、どのようなカリキュラムで創出されるかは、まさに異なる次元での教育実践となる。とくに大学においては、共通カリキュラムやプログラムでない場合、担当教員一人ひとりの手に委ねられている。

筆者は、2007年度から東海大学・教養学部国際学科2年生を対象とした必修英語科目「英語で学ぶ国際問題」（2007年度～2017年度）、「English for International Studies」（2018年度～）を担当している。本科目は担当教員間で共通する授業シラバスや成績規準・基準が存在するが、各教員には裁量を与えられ、履修学生の実態に応じた授業実践が可能である（伊東 2019: 23）。松尾の分類では、実践されるカリキュラムに近い。筆者は自己裁量で、2013年度からSDGsの前身である「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）」、さらに、2015年度以降はSDGsを内容として、CLILアプローチを試みてきた。大学の英語授業でSDGsと探究的な学習の機会を与えることはできるのか。次章では、筆者の大学英語授業の実践例として、当該科目の全体像から、2020年度のライティング指導への授業の流れと教員の支援に焦点をあてて報告する。

3. 英語ライティング指導

筆者が所属する東海大学国際教育センター（IEC）・英語教育部門は、東海大学の全学部・学科の1年次・2年次の英語必修4科目（卒業要件）のカリキュラム構築・運営のほか、多様な英語選択科目や学科依頼科目を提供している。そのうちの1つが教養学部国際学科（学科コードHW）2年次のための英語必修科目”English for International Studies（EIS）”である。3つの習熟度レベルによる5クラス編成（Advanced 1, Advanced 2, Intermediate 1, Intermediate 2, Basic）によって、春学期と秋学期にそれぞれ、EIS AとEIS C（日本人教員5名担当）、EIS BとEIS D（外国人教員5名担当）が開講される（春にAとB、秋にCとD）。全クラスともに、Cengage Learning社「Pathwaysシリーズ」を指定教科書として使用し、同じレベルのクラス間では、学期ごとに共通コア・ユニットを設けている。

当該科目に関しては、2019年度の授業実践（伊東 2020b）から基本理念の変更はないが、新型コロナウイルス禍の影響のもと、授業形態は対面型ではなく、東海大学「授業支援システム（Learning Management System; LMS）」（Course Power）を利用したオンライン・オンデマンド型をプラットフォームとする遠隔授業となった。しかし、担当教員の裁量によってライブ型も実施可能とし、筆者は週2回のLMS授業に加えて、6月から週1回のT365 Teams授業を並行して行った。ライティング活動については、LMS機能よりも有益な点が多いためT365 Teamsを利用した。秋学期については、東海大学のオンデマンド型はMicroAssist社のOpen Source LMS Moodle（Open LMS）に変更された。

3.1 English for International Studies A (2020 年度春学期)

日本人教員が担当する EIS A (春学期) と EIS C (秋学期) は、リーディング・ライティングを中心に、英語 4 技能と「批判的思考力 (Critical Thinking)」の育成を目指すカリキュラムになっている。2019 年度と同様、筆者は Intermediate 1 を担当し、中級レベル対象の” Pathways 1: Reading, Writing and Critical Thinking” (Vargo and Blass 2014) を使用している (表 1)。履修者は 16 名である。

3.1.1 EIS A : 学期全体の授業の流れ (2020 年度春学期, 全 28 回)

本科目の授業デザインに関して筆者が心がけていることは、探求的な学習を促進できるような学習者の学び合いや、教員の「足場かけ (scaffolding)」である (伊東 2020b: 18)。足場かけとは「親や教師などが、子どもや学習者に対して行う支援」で「足場掛けは協同的な対話の中で現れ、言語発達を促すと考えられている」 (白畑ほか 2009: 267)。「教科書を」使ってリーディング活動から始めると同時に、ストリーミング動画などの視覚教材も多用しながら、教科書の中の世界を SDGs と関連づけさせ、ライティング活動へと発展させるようにした。また、LMS アンケート機能を用いて、毎回の授業内容・トピックを振り返り、自由に自分の意見を述べることを習慣づけるようにした (日本語可)。

(1) オリエンテーションで SDGs 概要 (17 の国際目標と 196 のターゲット) と世界が抱える課題を導入し、(2) リーディング活動で教科書の Unit と関連づけ、(3) ライティング活動 (プロセス・ライティング) で学生一人ひとりの興味・関心に応じた SDG を選び、(4) 補助教材の多用と授業の振り返り (Reflection) を通じて批判的思考力の育成につなげながら、ライティング課題 (プロセス・ライティングの最終稿) を第 26 回授業 (Class 26) にて提出する。

3.1.2 EIS A : オリエンテーションと振り返り (2020 年度春学期, Class 3)

2020 年度春学期は遠隔授業のため、LMS に全 28 回の授業を設定した。毎週火曜日と金曜日の午前 12 時に授業公開というスケジュールである。Class 1 (5 月 12 日) と Class 2 (5 月 15 日) は全クラス共通のオリエンテーションとし、Class 3 (5 月 19 日) 以降は各担当教員が授業設定と公開を行う形とした (但し、リーディング中間テスト、リーディング期末テスト、ライティング作品提出日は共通)。

筆者の担当クラスでは Class 3 で SDGs に関するストリーミング動画 (各 4 本) を T365 Stream で配信し、その後も継続的に SDGs や授業内容に関係する動画を配信した。また、毎回の授業で、教科書の内容や SDGs に関連する LMS 資料教材 (Tips & Reflection) を提示し、学生には LMS アンケートで授業内容の振り返り (Reflection) を提出させた (表 2, 表 3)。Class 3 では、日本の大学生には遠い存在であろう難民・避難民や UNHCR を Tips で紹介し、アンケート質問項目に含めた。

3.1.3 EIS A：リーディング活動からライティング活動へ（2020年度春学期，Class 17）

春学期のIntermediateクラスの共通コア・ユニットはUnit 5とUnit 2であった。SDGsについては、各Unitのリーディング教材2つ（Lesson A, Lesson B）とそれらと関連性が深いものを3つ選んで授業を進め、教科書の内容理解のためにストリーミング動画を提示した（表4）。例えば、Unit 2（Learning Experience）のLesson Bは2004年「世界最高齢で小学校に入学した」と認定されたケニアの男性キマニ・マルゲ（Kimani Maruge）を扱った内容だが、2019年度は、マルゲ氏を題材にした映画「The First Grader（おじいさんと草原の小学校）」（英語・日本語字幕）を教室内でDVD視聴したが、2020年度では本映画のトレーラーURLをLMSに貼り付けるなどの調整を図った。

表1 English for International Studies A：授業シラバス抜粋（2020年春学期）

年度・学期 Semester/Year	2020年度春学期
科目名 Course Title	English for International Studies A
担当教員名 Teacher Name	伊東弥香（Intermediate）
開講日 Class Day/Time	火曜日・金曜日 2時限
1. テーマ・キーワード Theme & Key Words	
<ul style="list-style-type: none"> ● 「Health」「Education」 ● ESP, Glocal issues, English Integrated skills 	
2. 授業要旨または授業概要 Course Description	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 本授業は国際学科2年生のためのESP（専門的内容を英語で学ぶ）の授業である。春学期は「Health」「Education」の2つの大きなテーマに沿って実習中心の授業を展開する。 ・ 本授業では英語の4つのスキルのうち、リーディングとライティングに焦点を当てながら、外国人教員の担当する「English for International Issues B」（月・木2時限）で強化されるリスニング、スピーキングと連動させて、「統合的な英語力（integrated skills）」と「批判的思考力・クリティカルシンキング（critical thinking）」を身につける。1年次の英語必修4科目で培った基礎力を土台に、国際学科学生に求められる総合的な知識と英語力の応用・発展を目指す。 ・ 具体的には： <ol style="list-style-type: none"> ① ある程度まとまった長さの英文の趣旨や詳細を読んで理解した上で（受信・理解能力）、英語によるグループワークやディスカッションを通して、自分の意見を述べたり、それを文章にまとめる（発信・表現能力）。 ② テキストの理解をもとに様々な言語活動を行い、それを通じて各テーマに対する理解を深める。社会的・歴史的・文化的背景に加え、時事的な問題との関連についても考え、それぞれの分野に特徴的な語彙や表現を学習し、自分の言葉で内容の要約や、英語での自己表現ができるよう訓練する。 <p>テキストのほか、必要に応じて適宜プリントなども使用する。授業時にはビデオなどの視聴覚教材を多用し、テーマに関するより深い理解を促す。</p>	
3. 学修の到達目標 Learning Goals	
<p>上記の2つのテーマに関連したテキストや副教材（教科書、新聞・雑誌記事、映像資料など）を利用したさまざまなコミュニケーション活動を通じて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在、世界や日本が直面する国際問題への理解を十分に深め、それらの意味や意義、あるいは重要性を認識することができる。 ・ 国内外の問題や課題について、主体的に学び、分析・比較・判断などの複雑な思考力を用いて、批判的に考えることができる。 ・ 授業内のディスカッションや協働学習によって、多様なものの見方や考え方を学び合うことができる。 <p>外国人教員が担当する「English for International Studies B」とともに、本学卒業後に様々な分野で活躍する国際人となるような英語力の基礎を確立する。</p> <p>本科目は東海大学の英語教育方針（ディプロマ・ポリシー）に準じ、下記の到達目標を3本柱とする。</p>	

<ul style="list-style-type: none"> ・ 知識・理解 ・ 汎用的技能 ・ 態度・志向性
--

表 2 EIS A: Class 3 TASKS (2020 年度春学期)

1)	<p>Video viewing (T365 Stream) (ストーリーミング動画の視聴)</p> <p>Click the links below, then click on the following titles to watch the video clips. (次のリンクをクリックし、T365 Stream 公開中の動画を観てください。全部で 4 本あります。)</p> <p>[UNCHR の歩み / 人を守る人の手 / マララ・デー:すべての子どもに教育を/ ピコ太郎 × 外務省 (SDGs)]</p> <p>URL: https://web.microsoftstream.com/video/92c46d5c-6aa7-4bf5-a60d-39302284bb3f?list=studio</p> <p>URL: https://web.microsoftstream.com/video/ae9c417-fd25-442e-b110-10cc0ba1d6a8?list=studio</p> <p>URL: https://web.microsoftstream.com/video/958f4436-dd1f-4438-9cbf-2f02f5fac453?list=studio</p> <p>URL: https://web.microsoftstream.com/video/90a53a68-e819-4fa3-a7e0-fcc80503e355?list=studio</p>
2)	<p>Class 3 Tips and Reflection downloading (Tokai LMS) (資料教材のダウンロード)</p> <p>Click below, download “Class 3 (May 19) Tips & Reflection” and save the PDF file. Read the file and prepare your response to the question off-line). (下の資料教材をクリックして、PDF ファイルをダウンロードし保存する。オフラインで資料を読み、資料に書かれている質問に回答できるようにしておく。)</p>
3)	<p>Class 3 Reflection (Tokai LMS) (アンケートの提出)</p> <p>Click below, and answer the questions “Class 3 Reflection” on the LMS (下のアンケートをクリックして、LMS 上で回答しなさい。出席とみなします。)</p>

表 3 EIS A: Class 3 TASKS – Tips & Reflection (2020 年度春学期)

Tips	<ul style="list-style-type: none"> ・ 難民・避難民 (refugees) ・ 気候「難民」(climate refugees/migrants) ・ 国連難民高等弁務官事務所 (The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees: UNHCR) ・ UNHCR の仕事 ・ 国際連合 (United Nations: UN) ・ 持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs)
Reflection	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業内容は理解できましたか (4 件法) 2. 国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の仕事について理解できましたか (4 件法) 3. 難民・避難民はどのような人たちのことか知っていましたか (4 件法) 4. 難民・避難民は自分自身の生活に関わっていると思いますか (4 件法) 5. 本日の授業内容に関して、「自分自身が学んだこと」「考えたこと」を説明しなさい (500 字)

表 4 EIS A : 教科書と SDGs とストーリーミング動画の例 (2020 年度春学期)

1	<p>Unit 5: The World in Our Kitchen</p> <p>Lesson A: The Toaster Project / Lesson B: From Farm to Fork</p>
SDG 3	Good Health and Well-being (すべての人に健康と福祉を)
SDG 12	Responsible Consumption and Production (つくる責任 つかう責任)
SDG 17	Partnerships for the Goals (パートナーシップで目標を達成しよう)
<p>How I built a toaster — from scratch トーマス・トウェイツ: トースターを 1 から作る方法 (10:51)</p> <p>https://www.ted.com/talks/thomas_thwaites_how_i_built_a_toaster_from_scratch</p> <p>What's wrong with what we eat 我々の食料に関する課題 (20:08):</p> <p>https://www.ted.com/talks/mark_bittman_what_s_wrong_with_what_we_eat</p> <p>Teach every child about food 子ども達に食の教育を (TED Prize 授賞講演) (21:38):</p> <p>https://www.ted.com/talks/jamie_oliver_teach_every_child_about_food</p>	

2	Unit 2: Learning Experience Lesson A: The World's Oldest First Grader / Lesson B: Global Education – News Stories from the World of Learning	
	SDG 4	Quality Education (質の高い教育をみんなに)
	SDG 10	Reduced Inequalities (人や国の不平等をなくそう)
	SDG 16	Peace, Justice and Strong Institutions (平和と公正をすべての人に)
The First Grader Trailer - The First Grader Movie Trailer (2:09) https://www.youtube.com/watch?v=tiImgi_scTk The Commencement Address スティーブ・ジョブズ スタンフォード大学卒業式スピーチ(15:05) http://news.stanford.edu/news/2005/june15/jobs-061505.html Ethiopia Reads 1080P (1:30) https://www.youtube.com/watch?v=DiF_o-8T0qE エマ・ワトソン UN Women 親善大使 国連でのスピーチ (日本語字幕) (11:47) https://www.youtube.com/watch?v=jQbpLVI6DwE		

3.2 EIS A: ライティング活動 (2020 年度春学期)

2019 年度と同様、春学期のライティング課題は「問題解決型ライティング・パラグラフ (problem-solution paragraph) 」とした。学生達が「資質・能力を活用する」英語授業の内容にするためには、彼ら自らが興味・関心を持つことが重要である。ライティング課題の詳細スケジュールはリーディング中間テスト (Class 14) 後に提示し、学生達は SDGs の中から興味・関心のある目標や課題を 1 つ選び、SDGs で示される世界の課題や現状を調べることを出発点とした。それらの課題解決のために取り組む具体的な事例を 1 つ調べて、ライティング作品に仕上げるというプロセス・ライティング (process writing) に春学期後半 (Class 17) から取り組んだ。SDGs はもともと 17 の目標が相互に関連しているため、ライティング課題で選ぶトピックについては、教科書 Unit 5 と Unit 2 と直接関係するものでなくても可とし、ライティングの分量 (単語数) 制限も設けなかった。春学期の段階では、SDGs に関わる事実の「調べ学習 (investigative learning) 」を通して、知識 (remembering) ・理解 (understanding) ・応用 (applying) という低次思考力 (lower-order thinking skills: LOTS) の活性化を確実にすることを目標とし、秋学期のライティング活動の土台作りとした。

3.2.1 プロセス・ライティング：課題と手順

ライティング課題は LMS 上にワークシートを使って提示した (Class 17) (表 5)。なお、表内の注釈については、Draft 1 と Final Draft を T365 Teams で行う旨、Class 19 にて指示した (表 6)。

3.2.2 プロセス・ライティング：指導

問題解決型ライティング・パラグラフの指導については、Class 16 から Class 18 の LMS 資料教材 (Tips & Reflection) で Writing Tips を提示し、Teams 授業にて補足説明を加えた (表

7)。パラグラフの構成など、基本事項、とくに日本語とは異なる点を繰り返して提示・説明するようにした。また、表5、表6の通り、ワードファイルのテンプレートも配信した。

3.2.3 プロセス・ライティング：添削と評価

作品の構想 (brain storming) 段階から、下書き (draft writing) , 推敲 (revising) , 編集・清書 (editing) などにおいて、教員による添削・フィードバックや、他の学習者との相互検討を通して作品を書き上げ、学習者が自律的な書き手になることをねらうのがプロセス・ライティングである。今回のライティング課題では、Pre-draft (任意) と Draft 1 (必須) を経て Final Draft (最終稿) を提出する手順としたが、学生からの (個別の) 質問や更なる推敲の提出を推奨した。

評価については、1年次の英語必修科目で使用した「作文評価表」という評価規準・基準を示したルーブリック (rubric) を用いて、パラグラフの「内容」「構成」「文法」「語彙」「句読点など」の全5項目で評価をした (計50点満点)。国際教育センター・英語教育部門のカリキュラム委員会が作成した当該ルーブリックは、通常、教員からの (最終) 評価のみに使われるが、筆者の場合、プロセス・ライティングの一環として、学生に下書きと一緒に「自己評価」を提出させ、教員からの添削・フィードバックの返却時に (自己評価と比較できるように) 評価の結果を伝える形にしている。2019年度までは紙媒体で「作文評価表」を提示させたが、今回から、テンプレートの上部に作文評価表を加えた (表8)。その他の添削やフィードバックについては、ワードファイルに直接コメントや修正を加え、Teams のコメント欄も活用した。

表5 EIS A : Writing Task Instruction 抜粋 (2020年度春学期)

本ワークシートを使い、提出スケジュールを確認しながら、ライティング課題を進めなさい (Class 17~Class 26)。

1 課題スケジュール			
(1)	Pre-draft	7月7日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task Template (Pre-Draft) (LMS レポート教材) をダウンロードする (Class 17 より) Writing Task Rubric ((LMS 資料教材) = 「作文評価表」 (PDF) をダウンロードする (Class 17 より)
		7月14日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task Template (Pre-Draft) (LMS レポート教材) を提出する (Class17に) [Title] と [Topic Sentence] 部分のみ 7月15日 (水) 以降は提出不可
		7月17日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> 添削ファイルを返却 (by Ito) (Class 17 に)
【注】 (2) Draft 1 と (3) Final Draft のテンプレート配信・ファイル提出方法は改めて指示します。			
(2)	Draft 1	7月24日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task Template (Draft 1) を提出する (Class 22 に) 「作文評価表」を参照して自己評価も記入する (Class 22 に) ⇒ 7月31日 (火) フィードバック返却予定 (by Ito)
(3)	Final Draft	8月7日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task Template (Final Draft) を提出する (Class 26 に) 「作文評価表」を参照して自己評価も記入する (Class 26 に) ⇒ Writing 課題の評価確定 (by Ito)
2 「課題解決型」パラグラフ (problem and solution paragraph)			
(1)	トピック・主題・話題	国連『持続可能な開発目標 (The SDGs)』の目標1~目標17から1つ選ぶ	

	(Topic)	
(2)	本旨・論旨 (Main Idea)	パラグラフの中心となる自分の考えを上記①～⑩からさらに絞り込む
3	パラグラフ構成 (チェック項目)	
(1)	主題文 (Topic Sentence)	✓
	SDGs (目標 1～17) のどれか	
	本旨・論旨は何か	
	何が「問題・課題」なのか	
	なぜ , それが「問題・課題」なのか	
	どうすれば, その「問題・課題」を解決できるのか (具体例を報告する)	
(2)	支持文 (Supporting Sentence)	✓
	One solution (解決策の中から1つに絞る) — どうすれば, その「問題・課題」を解決できるのか (具体例を報告する)	
	One answer — 解決方法 1	
	A second answer — 解決方法 2	
	A final answer — 解決方法 3	
	なぜ, その解決策 (具体的には解決方法 1～3) が良いのか, 有効なのか (具体例を報告する)	
(3)	まとめの文 (Concluding sentence)	✓
	主題文を別の形で言い換えているか	
	「問題・課題」とその解決策についてまとめているか	

表 6 EIS A: Class 19 TASKS (2020 年度春学期)

4)	<p>Writing Task Template (Draft 1) downloading (Teams 課題教材のダウンロード) Access the Teams “HW-ESP (A) MikaITO” and download “Writing Task Template (Draft 1) (Teams 課題教材)” and save the word file. Work on the template as directed. (T365 Teams に行き, 手順に従って課題ファイルをダウンロードし保存する。ライティング課題の指示に従って課題をこなしてください。)</p> <p>*Channel (チャンネル) : Writing Task Draft 1 (Class 19 – Class 22) *Assignment (課題) : Writing Task Draft 1 (Spring 2020) *Instructions (手順) :</p> <p>(1) Writing Task Template (Draft 1) (ワードファイル) ダウンロード (2) Draft 1 を編集・作成 (作文と自己評価) (3) クラスルームの [全般] チャンネルに移動し, [課題] を選択 (3) [+作業の追加] を選択して Draft 1 ファイルをアップロード (4) [提出] ボタンを選択</p>
----	--

表 7 EIS A: プロセス・ライティング指導 (2020 年度春学期)

Class 16 (7月3日) Teams 授業日	Writing Tips 1	The Topic and the Main Idea	<p><i>What are a topic sentence (主題文) and the main idea (本旨) ?</i></p> <ul style="list-style-type: none"> Text Organizations (テキストの構成) Paragraph (パラグラフ) ・Topic (主題) ・Main Idea (本旨) Paragraph Organizations (パラグラフの構成) Independent Writing Idea Map (参照ダイアグラム)
Class 17 (7月7日)	Writing Tips 2	Paragraph Organization and Process Writing	<p><i>What makes a paragraph (パラグラフ) ?</i> <i>What is the process writing (プロセス・ライティング) ?</i></p>
Class 18 (7月10日) Teams 授業日	Writing Tips 3	A Problem and Solution Paragraph	<p><i>What is a problem and solution paragraph (問題解決型パラグラフ) ?</i></p> <ul style="list-style-type: none"> Steps to follow (問題解決型パラグラフを書くためのステップ) Paragraph Organizations (パラグラフの構成) Problem and solution Paragraph (見本)

表8 EIS A: プロセス・ライティング評価 (2020 年度春学期)

Date:	Class ID #	University ID# 9BHW	Name			
<u>作文評価表</u> <u>writing task</u> <u>rubric</u>	内容 content	構成 organization	文法 grammar	語彙 vocabulary	句読点など mechanics	合計 total
得点 points	15	10	10	10	5	50
自己評価点 Self-evaluation						
Your points						

4. 考察

新型コロナ禍の影響のもと、どの教育現場においても、2020年度の授業実践は試行錯誤の連続であろう。大学でも、遠隔授業による想定外の困難・障壁にぶつかりながら、従来の基本理念を貫きつつ、教員はどのように新しい発見を授業デザインに反映させることができるのか。本章では、遠隔授業にて実施している筆者の英語ライティング指導についてまとめる。

4.1 英語ライティング指導

探求的な学習とは、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の過程をたどる問題解決的な一連の学習活動のことである。改訂版タキシノミーにおける認知的領域の6つの次元・思考力でも示されるように、学習者は単に知識を持っているだけではなく、高次思考力(HOTS)を活性化させて、その知識に関する自分自身の認知を理解し、新たなものを創り出すことが求められる(伊東 2020b: 20)。ところが、日本の大学の英語授業でライティング指導を行う場合、そもそも学生達が現実社会の実情や世界的な課題への興味・関心や、知識を持っているのかという根本的な疑問が生じる。教員にとって、どのようなライティング課題を設定し、学生への足場かけをするかが大きな問題である。

筆者が大学の英語授業においてSDGsを用いる理由は、SDGsの基本理念が「地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind)」であり、学生一人ひとりがSDGsの示す17の国際目標と196のターゲットの何かしらに自分を関連づけることと、英語科目と他科目をつなぐことを可能にするからである。さらに、英語ライティング活動において、SDGsに沿った問題解決型パラグラフのプロセス・ライティングを課題とすることは、教科横断的な視点から探求的な学習を促進し、学習者自身の問題解決能力の育成に寄与すると考える。

ライティング活動は、文字を媒介する発信技能であるため、他の3つの活動(リスニング、リーディング、スピーキング)とは異なる困難さを伴う。EIS Aにおいては、リーディング活動(プレ・リーディング、ホワイル・リーディング、ポスト・リーディング)に十分に関連づ

けながら、学習者が適したトピックや題材を選択し、彼らの背景知識やスキーマ (schema) に留意・配慮した指導を心がけるようにした。

4.2 今後の課題

4.2.1 2020年度秋学期に向けて

2020年度春学期の Final Draft で提出されたタイトルは表9の通りである (順不同)。タイトルからは、必ずしも効果的・適切なタイトルとは言えないものが多いが、学生の興味・関心や課題の設定が読み取れる。表10はルーブリック評価の平均点である。本稿の目的は、学生のデータを統計的処理・分析することではなく、また、数値による統括的評価 (summative assessment) が学習者の学びのプロセスを必ずしも反映するものではないと筆者は考えている。しかし、ルーブリック評価の数値に呼応する記述文 (descriptors) は学生との共通フレームワークとしての意味・意義がある。例えば、「内容 (content)」は15点満点で評価するが、今回の平均値 9.13 の範囲である記述文 (7点以上, 10点未満) は次の3つである。

- ・ 具体的な事実やデータが足りず、説得力があまりない
- ・ 創造的で表現豊かな内容に欠ける
- ・ 主題をサポートする具体例・詳細を多少使った簡単な作文

実際に、学生達の作文を読むと、内容と構成に苦労しているものが多い。たくさんの情報を集めても、それらをどう整理し、論理的に構成し、英文でまとめるかが大きな課題である。問題解決型パラグラフの見本を共有し、テンプレートに沿うように指導を繰り返したが、学生によってはなかなか改善できないケースも散見された。その意味において、SDGs を用いて学生達の興味・関心を引き出し、調べ学習、ひいては探求的な学習に導くことと、英語ライティング活動には大きな離が存在すると言える。「日本 (母語) であれば」というジレンマを引き起こすことも学習意欲の低下と英語嫌いにつながる可能性がある。

2020年度秋学期 (EIS C) のライティング課題は、問題解決型パラグラフをふまえた、「意見型パラグラフ (opinion paragraph)」としている。春学期の EIS A と同様に、SDGs を用いて、学生達は英語のパラグラフの構成 (主題文, 支持文, まとめ文) を理解した上で、明確な「問い」を立てて、客観的な「根拠」を説明し、自分自身の「答え・提案」を提示しなければならない (表11)。

筆者自身の課題として、学期全体の流れの中でライティング活動を支援する足場かけを行いながら、調べても答えが見つからない問いを見つけていく探求的な学習へとつなげ、分析 (analyzing)・評価 (evaluating)・創造 (creating) に特徴づけられる高次思考力 (higher-order thinking skills: HOTS) に働きかけるための授業デザインを考える工夫が必要である。例えば、春学期の考察に基づき、学生達の英語ライティングにおける内容と構成のより良い改善を図るために、パラグラフにおける「結束性 (cohesion)」「一貫性 (coherence)」「ディスコースマーカー (discourse marker)」を Tips として指導ポイントに加える予定である。結束性とは

「語と語、文と文が明示的に互いに結びついてテキストを構成すること... 結束性を生み出すものとして、接続詞や照応表現 (anaphora)」 (白畑ほか 2009: 55) があり、大学の英語ライティング指導ではなかなか十分な説明に至らないことが多い。

2021年度については、英語ライティングの基本に加えて、学生の背景知識の活性化にとどまらず、批判的思考や問題解決や建設的な対策について考える活動をどのように取り入れるか。1年間 (春学期と秋学期) の授業デザインを見直し、ライティング課題の高度化の調整を含め、意見型パラグラフに至るまでの足場かけの活動や指導方法などを再検討する必要がある。

4.2.2 SDGs カリキュラムとの融合に向けて

英語授業でCLILの枠組みを用いて英語教育とSDGsを融合するアプローチを用いるためには、SDGsカリキュラムからの視点が不可欠であろう。第一に、SDGsの17の目標を知ることは大切であるが、それらを暗記することが目的ではなく、その基本理念を理解することが重要である。田中ほか (2019) が指摘するように、SDGsには「公正 (equity)」「共生・包摂 (inclusion)」「循環 (circulation)」という3つの理念があるが、それらの間には矛盾と葛藤があり、唯一絶対な解答はなく、解決策を模索し続けなければならない。これらをふまえた上で、SDGsカリキュラムの特徴として、(1) 参加型学習とワークショップ、(2) 学校と社会の連携、(3) カリキュラム・マネジメントの3点をあげている (田中ほか 2019: 19-20)。また、SDGs学習をデザインするときの問題になるのが、教育現場におけるカリキュラム・マネジメントである。本稿における筆者の英語授業は、先に述べた松尾 (2019) の4つのカテゴリーの「③実践されるカリキュラム (教師による授業)」であるが、様々な教育現場やSDGsカリキュラムの先行実践例を参照しながら、英語授業デザイン構築を進めていきたい。

表9 EIS A: ライティング・タイトル (2020年度春学期)

Our Life and Sea	Improve Ahead Sick to Get Health	What is sustainable palm oil?
Gender gap in Japan	Protect Environment	Change Vietnam's diet and save lives
Why make is blue, female is red	Clean ocean	How can we get rid of poverty?
Resolving Climate Change	The girls lost their dreams	Education problem in South Sudan
Child Poverty in Developed Country and Donation	Quality education for every children	Black Lives Matter
Fighting To Eliminate Sexual Harassment		

表10 EIS A: ライティング・評価 (2020年度春学期)

作文評価表 writing task rubric	内容 content	構成 organization	文法 grammar	語彙 vocabulary	句読点など mechanics	合計 total
得点 points	15	10	10	10	5	50
平均 Your points	9.13	6.63	6.94	7.13	4.56	34.48

表 11 EIS C : Writing Task Instruction 抜粋 (2020 年度秋学期)

本ワークシートを使い、提出スケジュールを確認しながら、ライティング課題を進めなさい (Class 15~Class 26)。

1 課題スケジュール				
(1)	Pre-draft	Class 15~ 11月20日(金) Teams	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task OPINION (Draft 1)(氏名記入)をダウンロードする (Pre-draft に使用する) Writing Task Rubric = 「作文評価表」(PDF)をダウンロードする 	
		Class 17 11月27日(金) 23:59JST Teams	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task OPINION (Draft 1) (氏名記入済み) を提出する (Pre-draft として使用する) [Title] と [Topic Sentence] 部分のみ ⇒ 12月1日(火) 添削ファイル返却予定 (by Ito) 	
(2)	Draft 1	Class 22 12月15日(火) 23:59JST Teams	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task OPINION (Draft 1) (氏名記入済み) を提出する 「作文評価表」を参照して自己評価も記入する ⇒ 12月22日(火) 添削ファイル返却予定 (by Ito) 	
(3)	Final Draft	Class 22 12月15日(火)~ Teams	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task OPINION (Final Draft) (氏名記入) をダウンロードする 	
		Class 26 1月12日(火) 23:59JST Teams	<ul style="list-style-type: none"> Writing Task OPINION (Final Draft) (氏名記入済み) を提出する 「作文評価表」を参照して自己評価も記入する ⇒ Writing 課題の評価確定 (by Ito) 	
2 「意見型」パラグラフ (opinion paragraph)				
(1)	トピック・主題・話題 (Topic)	国連『持続可能な開発目標 (The SDGs)』の目標1~目標17から1つ選ぶ		
(2)	本旨・論旨 (Main Idea)	パラグラフの中心となる自分の考えを上記①~⑯からさらに絞り込む		
3 パラグラフ構成 (チェック項目)				
(1)	主論文 (Topic Sentence)			✓
	SDGs (目標1~17) のどれか			
	本旨・論旨は何か (main idea)			
	何が「問題・課題」なのか			
なぜ、それが「問題・課題」に対する考えは何か				
(2)	支持文 (Supporting Sentence)			✓
	Your opinion — 本旨・論旨は何か			
	Reason 1 — 理由1			
	Reason 2 — 理由2			
	Reason 3 — 理由3			
なぜ、これらの理由が良いのか、有効なのか				
(3)	まとめの文 (Concluding sentence)			✓
	主論文を別の形で言い換えているか			
「問題・課題」とその解決策についてまとめているか				

5. むすび

本稿の目的は、学習者の「資質・能力を活用する」英語授業デザイン構築のための理論と実践を検討することであった。一貫性英語教育の視点から、小・中・高の学習指導要領で定められた内容を知ることは、大学の英語科の授業デザイン構築にとっても重要であるという考えか

ら、2020年度教育改革の柱の1つであった学習指導要領の改訂キーポイントである「教科横断的カリキュラム・マネジメント」を概観した。新しい学習指導要領においては、「道具としてのことば」や、コミュニケーションを単なる「ことばのやりとり」としてとらえるという、従来からの日本の外国語・英語教育の目的・目標に関する問題点が浮かび上がってくるものの、その一方で、教科横断的な視座に立ち、探求的な学習を促進することで、英語科においても、文化の境界線を越えて意味の共同体を形成する能力としての相互文化的コミュニケーション力の育成が可能になる。さらに、英語科の授業デザイン構築には、学習者が「資質・能力を活用する」ことができる内容の充実や深さが必要であり、思考能力等の資質・能力を用いて学ぶ必要があるのは「概念」である（国立教育政策研究所 2016: 112）。

前述の通り、新しい学習指導要領で求められている「教科横断的なカリキュラム」や「探求的な学習」を大学という異なる文脈で発展させるには、教養科目・基礎専門科目との横断カリキュラムが必要である。筆者は、2018年度に全学部・学科1年生対象の発展教養科目「国際理解」（必修）を担当する機会を得ることができたため、日本語（母語）でSDGs（内容）を学ぶという授業内容・方法を足場かけとして、翌2019年度の国際学科2年生対象のEISA（春学期）とEISC（秋学期）の英語授業に発展させる試みを行い（伊東 2020b），手ごたえを感じることができた。しかし、小・中・高のように制度化されたカリキュラムでない場合、大学において学習者の「資質・能力を活用する」英語教育（Competency-based EAP/ESP English education）のための授業デザイン構築のためには、それらの相違を明らかにする必要がある。

本稿では、英語授業でCLILの枠組みを用いて、英語教育とSDGsを融合するアプローチを用いる試みとして、筆者の大学英語授業におけるライティング指導の実践を報告した。しかし、本稿の執筆時期が学年度の途中という時間的制約があり、本来であれば、調べても答えが見つからない問いを見つけていく探求的な学習によって学生の高次思考力に働きかけることを目的とした「意見型パラグラフ」提出に至るまでの足場かけの活動や効果について含めることができなかつたことは本稿の限界である。ライティング活動だけではなく、2020年度のEISA（春学期）とEISC（秋学期）を通して、筆者の授業実践と学習者の「資質・能力」育成の関係性をまとめることが次の研究課題である。

注釈

本稿は、研究課題名「SDGs（持続可能な開発目標）と英語教育の融合」の一部である（東海大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会・2020年度承認番号20104）。

謝辞

本稿の執筆にあたり、拙稿をお読みいただき、適切な助言をくださった匿名の査読者に感謝し、この場を借りて深くお礼を申し上げます。

引用文献

- Anderson, L.W. & Krathwohl, D.R. (Eds.) (2001). A taxonomy for Learning, teaching, and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives. New York: Addison Wesley Longman.
- マイケル・バイラム (著)・細川英雄 (監修)・山田悦子・古村由美子 (訳) (2015). 『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民形成をめざして』, 東京:大修館書店. [原著 Byram, M. (2008). From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship - Essays and Reflections, Clevedon: Multilingual Matters.]
- 伊東弥香 (2010). 「日本の学校英語教育の目的・目標に関する一考察—英語教育大論争・「英語が使える日本人」の育成・新学習指導要領をふまえて—」, 『東海大学外国語教育センター所報 第30輯』, 東海大学, pp. 21-30.
- 伊東弥香 (2019). 「SDGs をジブンゴト化する—CLIL の枠組みで考える英語教育—」, 『東海大学教育開発研究センター研究紀要 第3号』, 東海大学, pp. 15-25.
- 伊東弥香 (2020a). 「2020 年度教育改革の動向—「高大接続改革と英語科教育養成のゆくえ—」, 『東海大学課程資格教育センター論集 第18号』, 東海大学, pp. 89-101.
- 伊東弥香 (2020b). 「世界をジブンゴト化する授業デザイン—SDGs と CLIL の融合—」, 『東海大学教育開発研究センター研究紀要 第4号』, 東海大学, pp. 15-37.
- 国立教育政策研究所 (編) (2016). 『国研ライブラリー 資質・能力[理論編]』, 東京:東洋館出版社.
- 松尾知明 (2014). 『教育課程・方法論—コンピテンシーを育てる授業デザイン』, 東京:学文社.
- 南美佐江 (2020). 「学習指導要領の改訂と国際理解教育—言語」の側面から—」, 日本国際理解教育学会 (編著) 『国際理解教育 Vol. 26』, pp. 53-60, 東京:明石書店.
- 文部科学省 (2017a). 「育成すべき資質・能力の三つの柱」(平成 29・30 年改訂 学習指導要領, 解説等)
https://www.mext.go.jp/content/1421692_7.pdf (2020 年 11 月 14 日引用)
- 文部科学省 (2017b). 「平成 29・30 年改訂 学習指導要領, 解説等」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (2020 年 11 月 14 日引用)
- 文部科学省 (2017c). 「学習指導要領改訂の考え方」(平成 29・30 年改訂 学習指導要領, 解説等)
https://www.mext.go.jp/content/1421692_6.pdf (2020 年 11 月 14 日引用)
- 文部科学省 (2017d). 「幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」(平成 29・30 年改訂 学習指導要領, 解説等)
https://www.mext.go.jp/content/1421692_1.pdf (2020 年 11 月 14 日引用)

文部科学省 (2017e) . 「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」平成 29・30 年改訂 学習指導要領, 解説等)

https://www.mext.go.jp/content/1421692_2.pdf (2020 年 9 月 4 日引用)

文部科学省 (2017f) . 「小学校学習指導要領 (平成 29 年公示) 解説 外国語活動・外国語編」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf (2020 年 11 月 14 日引用)

文部科学省 (2017g) . 「中学校学習指導要領 (平成 29 年公示) 解説 外国語編」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf (2020 年 11 月 14 日引用)

文部科学省 (2018a) . 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 総合的な探求の時間編 (平成 30 年 7 月) 』, 東京: 文部科学省.

https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf (2020 年 11 月 14 日引用)

文部科学省 (2018b) . 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 外国語編 英語編 (平成 30 年 7 月) 』, 東京: 文部科学省.

https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf (2020 年 11 月 14 日引用)

文部科学省 (2019) . 「高大接続改革」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/index.htm (2019 年 9 月 3 日引用)

佐藤学 (2009) . 「言語リテラシー教育の政策とイデオロギー」, 大津由紀雄 (編著) 『危機に立つ日本の英語教育』, 東京: 慶應義塾大学出版会, pp. 240-277.

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2009) . 『改訂版英語教育用語辞典』, 東京: 大修館書店.

田中治彦・奈須正裕・藤原孝章 (編著) (2019) . 『SDGs カリキュラムの創造—ESD から広がる持続可能な未来』, 東京: 学文社.

Vergo, M and L. Blass (2014) . *Pathways 1: Reading, Writing and Critical Thinking*, Cengage Learning.

東海大学教育開発研究センター 2020 年度活動報告

成川 忠之・及川 義道・馬場 弘臣・安森 偉郎・園田 由紀子
林 大仁・佐藤 直也・松本 隆・林 葉子

1. はじめに

教育開発研究センターは、東海大学の建学の精神に則り、学校教育に関する諸問題を総合的に研究し、教育の発展・充実に寄与することを目的としている。この目的の実現のため、授業方法の開発研究、教育内容と教育方法に関する諸課題を理・工学、人文・社会科学の観点から明らかにし、高等教育並びに中等教育に関わる総合的な研究と実践を重ねている。2020年度は、2019年度に引続き、科学研究費助成事業に採択された研究課題「主体的学修志向型学生を育成するオンライン仮想環境の開発と検証」（研究課題/領域番号 18K02909）の研究活動を展開した。また、コロナウィルス感染症に伴う教育方法の変化に対応するため、「遠隔教育研究」において、対面・オンライン併用型の授業方法に関する研究を推進した。さらに2020年度からは所員から新たに提案された「戦後世代に関する基礎的研究」「工学実験教育用ツールの製作に関する研究」「ダイバーシティを支える教養教育についての研究」の3つのプロジェクトを2年計画で開始した。

2. 科研費プロジェクトの進捗について（及川義道）

・プロジェクト概要

近年、大学で学ぶ目的や意義を持つことができず受動的な態度で学修に臨む学生が目立つようになってきた。その要因の一つはトロウ・モデルで言う大学が既にユニバーサル・アクセス型の段階に入り、より多様な学生が入学するようになったことが挙げられる。この段階では、今までのような教育体制や教育内容では、学生や保護者、社会の要求に十分応えることができない。特に変化が激しく、卒業後も新しい知識、技能を学び続ける必要性がある現代社会では、学生に単に知識や技能を習得させるだけではなく、将来に渡って学び続ける力を身につけさせることが重要である。そのような力を本センターでは「自続力」と言う造語で表現している。この「自続力」の獲得には、学生自らが主体的、能動的に学修に取り組む必要がある。その為には、自己肯定感、自己効力感といった、自己を認めることが重要となる。しかし、基礎力や応用力といった学修に必

要な力は低下傾向にあり、これが自己肯定感、自己効力感の低下に繋がり、そのストレスを回避する行動の一つとして、学生は学修そのものに価値がないものであると位置づけ、学修を積極的に回避する態度をとるようになる。この学修回避行動は仲間集団の中で強く確立される。そこで本プロジェクトでは1) 学生を主体的な学習を施行する仲間集団の中に位置付けることが学生の主体的、能動的な学習を引き出すことができるか、2) そのための仲間集団の形成支援をどのように行えば良いか、3) 実際にその方法によりどの程度効果があるかを、実践を通して検討するものである。

・2020年度のプロジェクト進捗状況

2020年度は学外の協力を仰ぎながら、SNSシステムの一つである Slack をベースとする学生間の情報交換を促進するシステムの構築を試み、運用試験を試みた。開発したシステムは Slack 上に授業や利用目的ごとにチャンネルと呼ばれる場所を定義し、これに教員および学生を登録して、相互に意見交換できる場を提供した。また、ボットと呼ばれるプログラムを利用し、不適切な発言を検出する機能、発言を促す機能を実装した。

運用試験では、化学の基礎を学習する工学部学生を主たる対象として実施した。まず、学生の学習に対する心情や行動様式に関する情報を得るため、システムを利用した情報交換の前にアンケート調査を実施した。その後、授業に関して自由に情報交換をおこなわせることとした。しかし、本年度については運用システムを開始する時期が12月にずれ込んだこと、対象とした授業が週1回の授業であったことから、活発な情報交換には至らず、十分な情報を得ることができなかった。このため、2018年度からの3年計画で実施されてきた本プロジェクトは本年度終了予定であったが、1年間延長し、2021年4月より追加の運用試験を実施することにした。

- ・成川忠之, 及川義道. (2020). 主体的学習指向型学生を育成するオンライン仮想環境を活用した地域連携型教育モデルの提案 (特集 空間概念の拡張とコンテキスト転換), *日本情報経営学会誌*, 40(4), 87-95.

3. 個別プロジェクトについて

(1) 遠隔授業研究 (及川義道)

2019年度より開始した本プロジェクトは、ICT(Information and Communication Technology)の教室での授業支援方法に関して、テレプレゼンスロボットを利用した教員および学生の授業への参加手法を中心に研究を行ってきた。しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延により、対面での授業が制約される状況となったことを受け、授業をオンライン環境で行うための方法について検討を行なった。

オンラインを活用した授業形態には、同時配信型（ライブ型）、オンデマンド型、対面・オンライン併用型が存在する。本プロジェクトではそれぞれの授業形態に関して、その実施方法等を検討し、その成果を学内のワークショップやセミナーにて紹介した。また、実際に一部の教授方法や技術は授業での実利用を試みた。

遠隔授業の技術的側面に関しては、設計した設備・環境を私立大学情報教育協会開催の私立大学教員向けFD講習会で実施に利用し、1人体制でもそれら技術を制御しつつ、講義が可能であることを確認した。これらの方法論については、今後、整理・公開する予定である。

更に、本プロジェクトでは、2021年度より対面授業の実施が強く望まれていることに鑑み、感染防止措置を講じつつ、対面授業を実施するための一つの方法として、ハイフレックス型の授業方法について検討を開始した。ハイフレックス型授業とは、教室で対面参加する学生とオンライン参加する学生に対して同時に授業を実施する形態である。本学では、この形態の授業に関する実績はなく、方法論、技術面の双方に関して、情報収集、ノウハウの獲得が急務である。このことから、本プロジェクトは2021年度もこのハイフレックス型授業を中心に研究を継続する予定である。

（2）戦後世代に関する基礎研究（馬場弘臣）

戦後世代に関する研究は、『東海大学七十五年史』（2018年刊行）の編纂を担当していた時期から課題としてきたテーマである。そこでは戦後の大学進学率の変遷と本学の学生数の変化を主な分析対象としながら、その背景となる政治・経済・社会・文化などの変化を総体的に見ていこうと試みた。現在は、こうした数値データを当時の大学新聞や広報と照らし合わせながらさらに分析を進めている段階である。

ただし、文明研究所の個別プロジェクト研究「戦後大衆文化の基礎的研究－緒形拳氏関係資料の整理から－」（馬場が兼任所員としてプロジェクトリーダーを務める。2017～2020年度）の成果として、横浜市歴史博物館において2020年1月3日から12月6日にかけて開催された特別展「俳優緒形拳とその時代－戦後大衆文化史の軌跡」の記念冊子として編集した『戦後大衆文化史の軌跡－緒形拳とその時代－』（東海大学×横浜市歴史博物館編、2020年10月刊行）に掲載した論文「戦後大衆文化史の展開と緒形拳」の中で、大衆文化と戦後世代の変化という視点からその一部をまとめた。

次年度には、以上の成果を論文として投稿できるようにする予定である。

（3）工学実験教育用ツールの製作に関する研究（安森偉郎）

理工学系の教育において、実体験による理論の確認、問題解決学習は重要であり、理工系の学部学科のカリキュラムには必ず加えられている。近年、実験教育に求められることも多様化しており、それに合わせた授業開発、実験テーマ開発は取り組むべき課題の1つである。本研究の2020年度の取り組みでは、近年、温室効果ガスによる地球温暖

化などによって、エネルギー問題への関心が高まり、再生可能エネルギーの1つとして注目されている太陽電池をターゲットにした教材の開発を試みる。

太陽電池を利用した実験テーマは小学校でも取り入れられている。しかし、これらの実験テーマでは、その中で太陽電池を利用しているに過ぎず、工学系の学生にはむしろ、太陽電池自体を製作させることの方が、より深い学びが得られると期待できる。しかし、専門のデバイス製作実習のような、十分な設備が必要な方法では、理工系学生の専門基礎実験のような実験で用いることは、事実上不可能である。そこで本研究では、半導体製造装置をほとんど備えていなくても、通常の実験室のような環境において太陽電池を製作する方法について研究するとともに、実験実習への応用についても検討している。

研究代表者らは2018年に半導体製造装置やフッ酸などを使わずにソーラーモータを駆動させることのできる教育用シリコン太陽電池の開発に成功した。しかしながらこの方法では太陽電池の製作だけで3コマ程度の時間を要するため、学生実験へ導入には更なる改良が必要となる。そこで製作工程における製作時間の短縮化を図るため、様々な条件で太陽電池を製作した。その結果、酸化硼素 B_2O_3 を 140 mg とした場合、熱拡散時間を 10min という超短時間化して太陽電池を製作してもソーラーモータを駆動させることができることが明らかとなった。

これにより太陽電池の製作からソーラーモータ駆動までを2コマで実施することが可能となり、学期中の学生実験等への導入が時間的に可能となることがわかった。さらに、多くの学生等に太陽電池製作からモータ駆動までを体験させることができ、太陽光発電の原理や半導体物性を深く学ぶきっかけとなると期待される。これらの一連の成果は応用物理教育 Vol. 44, No 1 (2020)pp19-24 に論文発表された。

- ・安森偉郎, 岡田工, 崔一煥. (2020). 半導体製造装置やフッ酸を用いないシリコン太陽電池における製作時間の短縮化, *応用物理教育*, 44(1), 19-24.

(4) ダイバーシティを支える教養教育についての研究 (園田由紀子)

近年、大学における教養教育を再考する研究が盛んにおこなわれている。グローバルゼーションや持続可能な社会など、単に経済的発展や技術の進歩だけを目指す社会から大きな転換が求められる中、単に「働くための能力」だけではなく、継続的に多角的に考え続けるための教養が求められている。中でも、多様な人々が活躍するダイバーシティという考え方は、SDGsの基盤となる考え方である。しかし、インターネット上等での匿名で特定の人々を攻撃するような行動態度をとる人々がたびたび問題視され、他者に対する差別や偏見、ステレオタイプの影響を大きく受けていることが推察される。さらに、大学では、留学生、発達障害、LGBTなど多様な特性を持った学生が多数入学しており、授業においてもダイバーシティな授業が求められている。これまでのステレオタイプ研究では、他者に対する「知識」、他者に対する「関心」が重要であることが指摘されて

いる。これは、学問的な枠組みに基づいた知識重視の教養から、「考える」「判断する」ための教養の必要性が高まっていることを受けている。これまで注目されてきた関連する社会人基礎力、アカデミックスキル、アントレプレナーシップ、学士力など様々な能力には、単なる知識だけでなく、それらを活用、応用していく力をも含むより実践的な力を求めてきたことが背景となっている。本研究では、自己肯定感形成のプロセスを中心に、ダイバーシティ社会を支える若者の育成に向けて必要な教育を、拡大し、複雑化する教養教育の枠組みの整理をしつつ検討し、これらの視点に加えて、大きな問題となっている学習意欲にもつながるプログラムの検討を行う。自己肯定感尺度やメタ認知尺度を用いたプログラムの効果測定による検証を目指す。

今年度は、持続的可能社会で基本となるダイバーシティ、インクルーシブなど、新たな社会的公平を示唆する概念について、多角的に検討を行い、類似する概念の整理、および、大学が目指すダイバーシティ教育、インクルーシブ教育とは何かを検討する。方法としては、関連する書籍や資料などを基に、文献研究を中心に行い、概念整理ののち、来年度に向け調査の準備を計画した。さらに、概念整理の成果を、口頭発表、論文発表、ワークショップを予定した。

文献調査では、必要となる複数の文献を購入し、共同研究者である日向寺祥子先生と分担しながら文献調査を行った。成果共有を目的とした研究会を開催し、成果をまとめることを試みたが、新型コロナの感染拡大により、すべての授業が遠隔となり、学内での打ち合わせ、研究会の実施が困難となり、オンラインでのミーティングを随時行ったが、文献調査のために購入した図書の共有が難しく、文献調査は予定より遅れている。概念整理の結果について、研究資料集に投稿する予定であったが、今回は投稿を見送り、次年度成果の発表を行うことになった。また、来年度のアンケート調査の集計分析の準備として、解析ソフト SPSS を購入し、調査設計の準備を始めている。さらに、教育プログラムの方法論などについて、研究会を通し、検討を行い、オンデマンドで実施可能なプログラムの検討、対面での教育プログラムの検討の双方からのアプローチが必要ではないかということから、Web カメラ等の購入を行い、オンライン、対面双方からのプログラム開発を目指すこととなった。

今年度は、主に文献を使った概念整理を中心に行った。特に、近年、ダイバーシティやインクルーシブといった概念は、様々な場面で流動的に使われている。教育場面では、障がい者教育を基にしたインクルーシブ教育が中心であり、ダイバーシティは、多様性、相違性といった言葉でありながら、人種・国籍・性・年齢を問わずに人材を活用することにより、ビジネス環境の変化に柔軟、迅速に対応でき高い成果を上げられる理念的な意味傾向が強い。これらの両方の側面を取り入れ、「ダイバーシティ&インクルージョン」と使われる場面も増えている。インクルージョンは、包括を意味する言葉で、多様性を認め、受け入れて活かすことを説明することができる。本研究で目指す視点は、教育や企業などの経済活動にとどまらず、広く市民としてダイバーシティ社会を構築、維

持することができる人材を大学でどのように育成するかという課題に向けて行われたものであり、広く関連する文献から、多様性理解、多文化共生などに向けた必要な概念整理を目指した。

文献調査より、自閉症やアスペルガー症候群、発達障害などの学生に対する様々な取り組みが示されており、大学の教育現場で「合理的配慮」や教育の工夫が求められていることが明確に示された。しかし、学生の障がいの有無や特性について、教員や他の学生の理解が強く求められるも、プライバシーへの配慮などの問題から、共有が難しくなるなどの問題が存在する。合理的な配慮について、他の学生からの理解も必要となり、インクルーシブ教育をささえるためのダイバーシティが求められることが分かった。また、大学においても、このような背景を持った学生が入学してくることが予測され、それらの背景や特性、経験を踏まえ、多様性を受容する教育を検討していく必要があることが分かった。さらに、ダイバーシティを支える人材教育では、社会的公平教育に加え、既存の価値観を振り返りつつ、新たな価値観を提示できる視点が必要であることが分かった。このことから、プログラムに、アントレプレナーシップの視点を取り入れ検討することが有効である可能性が分かった。

4. ワークショップ・研究会・フォーラム等

(1) 情報教育センター合同遠隔授業ワークショップ（及川義道）

2020年4月6日に情報教育センターと合同で、遠隔授業を始めるための情報提供を目的として、遠隔授業ワークショップをオンライン開催した。ワークショップでは、まず本センターの及川所長補佐が、文部科学省等の関連資料の解釈を中心として、遠隔授業の要件、最低限必要な授業の準備、遠隔授業を実施するための注意点などを説明した。その後、情報教育センターの宮川幹平准教授により、遠隔授業を行うためのLMS(Leaning Management System)の利用方法など、具体的手法をケーススタディー形式で説明がなされた。最後に、本センターの及川所長補佐がライブ配信やオンライン双方向授業、オンライン上でのグループディスカッションを実現するための方法として、ビデオチャットシステムの一つであるZoomについて、ライセンス取得から簡単なオンラインミーティングを実施する方法に関する解説を行なった。

(2) 学内むけ遠隔講義に関するゼミナー（成川忠之）

2020年4月27日に学内むけ遠隔講義に関するゼミナーをオンライン開催した。

在学生の履修申告が4月20日で終了し、履修者が確定しつつある段階で、情報教育センターと共催にて、履修学生全員に不平等にならないようコンテンツおよび講義方法を考えながら、最も教育効果が高いと思われるツールを使いながら講義が行えるよう、講義形態の分類や、各種ツールについての説明会を開催した。背景には学生のネットワー

ク環境の不十分さ、LMSを含めたツールへの負荷の増大にともなう利用トラブルの可能性を考えて、多様な手法を理解していただくことが重要だと考えた。

内容としては、学生へのメッセージ発信から、Teamsを使ったコミュニケーションおよびコミュニケーションが求められる講義形態での利用方法などについて、アプローチの方法、ツールの利用方法、実際の講義の形態などについて述べた。

開催はTeamsで行った。最初に、「メールによる学生の情報発信」というテーマで、情報教育センターの田中先生に講演いただいた。その中では、田中先生が作成された、自動履修者アドレス作成ツールの紹介も含まれた。つづいて、「学生との接点の持ち方」というテーマで、情報教育センターの日向寺先生より講演いただいた。その中では、ホームページの構成法として、お知らせ内容、受付メールの設定、LINE公式アカウントの取得と運用などが含まれた。つぎに、「Microsoft 365 Teamsの利用」と題して、情報教育センターの宮川先生に講演いただいた。その中では、TeamsのLMSとしての利用やTeamsのオンラインツールとしての利用が含まれた。つぎに、「授業の形態別の遠隔講義の例」として、現代教養センター成川が、ツールの使い分けとコンテンツの準備、紙媒体音声データを使うパターン、ナレーション入パワーポイントを使うパターンと授業動画を簡単に作成する方法などを紹介した。また、「60名規模のアクティブラーニング科目を今回の状況でどう代替するか」というテーマで、発展教養科目(PA)科目の田島先生にお話いただいた。最後に、現代文明論担当の岡本先生に、事前撮影した講義画像とPPTや講義用動画をひとつの画面に合わせて配信する方法についてお話いただいた。

(3) 第5回教育開発フォーラム：授業研究会（馬場弘臣）

2021年3月15日に「With/After コロナ時代の授業設計」をテーマとして第5回授業開発フォーラムをオンライン開催した。

2020年は新型コロナウイルスの影響によって、大学教育のあり方そのものが問い直された年だったといえよう。オンライン、オンデマンドを問わず、遠隔授業の導入という新たな事態に際しては、学生はもとより、教員、職員にも過分の負担を強いたことは間違いない。その一方で、遠隔授業がこのような災害時に関する授業方法だけでなく、通常の授業方法についても大きな可能性をもつものであることが明らかになったことも確かではないだろうか。2021年度の春学期は、遠隔授業と対面授業を50%ずつの比率で行うことが決まっている。ただし、対面授業にしても遠隔授業を取り入れた併用型の授業、そしてそれらを融合したハイブリッド型やハイフレックス型の授業も予定されている。そもそも遠隔授業については、教育開発研究センターがここ数年模索を続けてきた課題でもあった。

そこで、本年度の教育開発研究センターフォーラムでは、このWithコロナの状況を顧みるとともに、いずれ訪れるであろうAfterコロナの時代に向けて、どのような授業設計

ができるか、本年度の反省を含めて展望していきたいと考える。そこでフォーラムでは文系・理系など専門分野の区別なく、さまざまな視点から授業設計のあり方を検討するための授業研究会を開催することとした。研究会はオンラインで、第1部—口頭発表、第2部—ディスカッションの2部構成で実施された。口頭発表者とタイトルは以下の通りである。

- ① ポスト COVID-19 における授業の方法
及川 義道（理学部基礎教育研究室／教育開発研究センター所長補佐）
- ② ” With Corona 2.0” と私たち：従来と新しい授業形態の hybrid の提案
保坂 華子（文学部英語文化コミュニケーション学科）
- ③ 担当授業における昨年度の成果・課題と次年度の計画
斉藤 仁一朗（課程資格教育センター）
- ④ 授業形態に合わせたコミュニケーションツールの活用
加藤 和美（清水校舎清水供用教育センター外国語）
- ⑤ コロナ禍における情報教育センターの取り組み～コンピューター実習を伴う授業のオンライン化を中心に～
宮川 幹平（情報教育センター）
- ⑥ 音声自動追尾カメラと広角カメラを使ったハイフレックス型授業の可能性
園田 由紀子（教育開発研究センター）

①及川報告は、今回のフォーラムにおける個別報告の前提として、ハイブリッド型授業の内、ブレンド型授業、ハイフレックス型授業、分散型授業の特徴と問題点について具体的に紹介するという、総論的な位置を占める報告であった。

②保坂報告ではまず、英語文化コミュニケーション学科の授業から、対面授業、遠隔授業、併用型授業の長所と短所について報告された。その上で、分かりやすくおもしろく達成感がある授業は、教員と受講者が協力して作り上げていくという「いい授業」の根幹は変わらないとして、” With Corona 2.0” 以降の授業では、社会状況やニーズに応じて、それぞれの長所を活かしたハイブリッド型の授業形態を模索し、実施できる技量を磨き、進歩の段階を進めていくことが大事であるとされた。

③斉藤報告は、教職課程の授業の現状から春学期・秋学期のオンデマンド授業と、秋学期に実施した併用型授業の具体的な内容と課題について報告された上で、次年度の計画について説明された。遠隔授業については、数回に1回はオンライン授業を取り入れる、学生に「選択できる」場面を設ける、対面授業では、授業時間外のグループ活動を促すしくみ作りや自己評価の機会を取り入れるなど、具体的な計画が参考になった。

④加藤報告は、清水教養センターで外国語を担当された経験から、具体的なアプリケーションソフトや機器について報告された。遠隔授業で使われる機会が多い Teams と Zoom

の長所と短所をはじめとして、4台のiPadを使ったグループ活動、Spatical chat というアプリを使ったコミュニケーション活動のあり方など、興味深い報告であった。

情報教育センターの担当科目は、コンピューターを使うことが必須であり、PC教室を使用することが前提となっている。その意味でも注目されたが、⑤宮川報告によれば、センター全体の取り組みとして、受講生に連絡が行き渡るようにWebページを立ち上げたこと、学生の個別質問相談窓口を設けたこと、非常勤を含めて授業担当教員のサポートを尽力したことをあげられていた。次年度の取り組みについては、オンデマンド教材の活用やライブ授業に関する工夫など、学ぶ点が多い。ただ、本学では遠隔授業にTAをおくことができないことが大きな問題であるとの指摘がとくに印象に残った。

⑥園田報告は、ハイフレックス型授業について、音声追尾Webカメラや広角Webカメラを使った実証実験を行ったもので、その結果、見えてきた課題として、2台のWebカメラを使った際のエコーやハウリングの問題、TeamsとZoomを使った場合のそれぞれの問題点などについて報告された。具体的な実験結果であるため授業を進めながらのトラブルへの対応の難しさ、教室のWi-Fi環境が弱い場合の問題などの指摘は重要であろう。

以上のように、今回のフォーラムは、「いい授業とは」という理念的な問題から、遠隔授業の方法、アプリケーションや機器の活用、そして次年度の授業計画等々、担当や分野を問わず、さまざまな観点からの報告が行われた。第2部のディスカッションは予定時間を超えていろいろな意見交換が行われ、遠隔授業に関する関心と懸念の大きさがうかがえた。ここでは宮川報告と園田報告にあったように、ハイブレット型授業を求めらばTAなど何らかの処置が必要なこと、教室のWi-Fi環境の脆弱性といった問題、さらには同日に対面授業と遠隔授業が行われた際の教室の確保や、通信環境によって学生の学修が妨げられるのではないかといった問題は早晩、検討が必要であろう。次年度春学期の授業を終えた時点でまた、問題点の抽出と検討を望みたいところである。

5. その他、個人の研究活動（各所員）

論文（査読有）

- ・馬場 弘臣.(2020). 近世後期の相模国中央部における文化ネットワークー『和田篤太郎日記』を中心としてー, 年報 首都圏史研究 2019, 9, 5-20.

論文（査読無）

- ・馬場 弘臣.(2021). 講演録「戦後大衆文化史と緒形拳ー俳優アーカイブの可能性ー」, 文明, 26, 1-25.
- ・馬場 弘臣.(2020). 戦後大衆文化史の展開と緒形拳, 戦後大衆文化史の軌跡ー緒形拳とその時代, 82-115.

- ・園田 由紀子(2021). 新型コロナ感染拡大による大学教育の変化に関する教育社会学的考察, 東海大学教育開発研究センター研究資料集, 5, 39-54.

著書等

- ・林 大仁. (2020). ハングル能力検定試験 3 級総合対策, 株式会社秀和システム.
- ・林 大仁. (2020). ハングル能力検定試験 4 級総合対策, 株式会社秀和システム.
- ・林 大仁. (2020). 韓国語能力試験 TOPIKI 一問一答, 株式会社秀和システム.
- ・林 大仁. (2020). 韓国語能力試験 TOPIK II 一問一答, 株式会社秀和システム.

学会発表

- ・及川義道, 石原良美. (2020). ペンを握る圧力を用いた集中度の推定, 日本教育工学会 2020 秋季全国大会(第 37 回大会).

その他の活動

【執筆活動】

- ・馬場弘臣. 解説「資料から見る劇作家・北條秀司」北條秀司著『奇祭巡礼』（淡交社） P.278～283, 2021 年 2 月

【講演・講座】

- ・馬場弘臣, 講演「戦後大衆文化史と緒形拳－俳優アーカイブの可能性」横浜市歴史博物館, 2020 年 12 月 5 日(土)
- ・馬場弘臣, 展示解説「俳優緒形拳とその時代－戦後大衆文化史の軌跡」横浜市歴史博物館, 2020 年 10 月 10 日(土), 25 日(日), 11 月 8 日(日)、11 月 22 日(日)

【その他】

- ・馬場弘臣, 横浜市歴史博物館企画展「俳優 緒形拳とその時代－戦後大衆文化史の軌跡」(2020 年 10 月 3 日～12 月 6 日)の監修
- ・馬場弘臣, 上記展覧会記念トークショー「緒形拳の作品のその魅力 豊川悦司氏×貴島誠一郎氏」(2020 年 11 月 21 日)の司会
- ・馬場弘臣, 東海大学×横浜市歴史博物館『戦後大衆文化史の軌跡－緒形拳とその時代』(横浜歴史博物館, 2020 年 10 月)の企画・編集
- ・馬場弘臣, 座談会 企画展「俳優緒形拳とその時代－戦後大衆文化史の軌跡」を終えて 『横浜市歴史博物館 News』 50 号, P.8-P.13, 2021 年 3 月

【外部資金】

- ・馬場弘臣, クラウドファンディング「緒形拳さんのアーカイブを構築し、大衆文化の変遷に迫る！」(アカデミスト株式会社)で 2,149,000 円の資金を獲得

6. 総括

教育開発研究センターでは、かねてより教育における ICT の活用についての研究に取り組み、遠隔授業や授業支援システムについての知見を深めてきたが、ほんの1年前までは、そのような研究分野はとても特殊なものとして捉えられてきた。ところが、コロナ禍の影響により、好むと好まざるとにかかわらず、ほとんどの教員が遠隔授業を実践することとなり、遠隔授業は、今日では一般的な授業スタイルとなっている。本研究センターでは、この1年間に幾度となくセミナーやワークショップを開催し、これまで培ってきた遠隔授業や授業支援システムについての知見を学内に提供してきた。手前味噌になるかもしれないが、現在、東海大学にて遠隔授業がスムーズに実践されていることに、本研究センターが少なからず貢献できたのではないかと考えている。

現在では、二回目の緊急事態宣言も解除され、いよいよ世の中が正常化の方向に前身しつつある。とはいっても、感染者数は増減を繰り返し、余談が許されない状況にある。そこで、大学においても、学生に登校の機会を提供するために対面授業を推し進める一方で、感染を懸念する学生や教職員には、相応の配慮をする必要がある。したがって、新学期からは、対面授業と遠隔授業を併用するスタイルの授業形態を実践することが要求されている。その中には、教室での対面授業とオンデマンド型の遠隔授業を組み合わせ、学生に隔週交代で授業に出席してもらうことで、感染を予防する授業形態や、同じ時間に教室とリモートで同時に授業を進めるハイフレックス型の授業などがあげられる。そこで、本研究センターでは、学園内の教育開発の専門研究機関として、それら併用授業についての研究を進め、学内に還元していく所存である。

また、今年度から、それぞれの所員の問題意識に基づくサブプロジェクトを設定し、予算を配分した。このサブプロジェクトについては、本年度もコロナ禍の中でも前述の通り前進しつつある。サブプロジェクトは2年計画で、最終年度までに論文をまとめることとなっているので、来年度には実りある結果が多数報告されることを期待する。

東海大学教育開発研究センター紀要・研究資料集規程

2020年4月1日 制定

第1条 本規程は、教育開発研究センターが発行する紀要及び研究資料集の編集、発行について定める。

第2条 紀要及び研究資料集の編集、発行のため、教育開発研究センター内に次の構成員からなる編集委員会を置く。

委員長 教育開発研究センター所長

委員 教育開発研究センター所長が指名する若干名

[紀 要]

第3条 紀要は、教育開発研究センター及び学園関係者の教育に関する研究成果を公表することを目的とし、次の学術論文を掲載する。

原 著 研究・開発の成果をまとめたもので、新規性、独創性、有用性、信頼性があり、学術および教育の発展に役立つもの。

ノ ー ト 萌芽的研究、追試的研究、速報的なものなど。

調査報告 調査結果を速報的に伝えるものなど。

第4条 紀要の論文の形式は、別に定める「東海大学教育開発研究センター紀要・東海大学教育開発研究センター研究資料集執筆要項」に従うものとする。この要綱に従わないものは、受理しない。

第5条 紀要の論文は原則として、毎年募集の際に締め切りを設定し、翌年3月に発行する。また、論文は受理された日（採録された原稿の提出日）を記して掲載する。

第6条 紀要に投稿された論文は、次の通り処理する。

(1) 編集委員会は、当該論文の分野の研究者最低1名を査読者として選定する。

(2) 査読は次の項目について行い、その要件を欠いた論文は不採録とする。

分 野 本研究所の研究分野と関連する分野の論文であること。

新規性 同一または極めて近い内容のものが下記の公開刊行物等に既発表でないこと。

①学会誌 ②商業誌 ③大学の紀要 ④査読付きの会議録等

独創性 既発表または公知の事実から容易に推測されるものでないこと。

有用性 内容が学術または教育の発展に役立ち、読者の参考になると考えられるもの。

信頼性 内容が客観的に確認または認知できるような方法あるいは根拠に基づいたものであること。

読解性 論文としての形式を備え、読者が十分理解できるよう記述されていること。

(3) 編集委員会は、査読結果に基づき論文の採否を決定する。採録と決定したものは紀要に掲載する。軽微な修正で採録可能なものは条件付き採録とし、査読者の意見をつけて訂正を求め、再度査読を行い、採否を決定する。不採録の場合は、その理由をつけて著者に通知する。

第7条 著者は紀要に掲載された論文等について、東海大学機関リポジトリに登録・公開されることを許諾するものとする。

[研究資料集]

第8条 研究資料集は、当研究所の年度計画に基づく研究の報告、その他、実態調査報告、中間報告、査読を求めない報告等の公表を目的とする。掲載にあたっては、その内容によって以下の種別をつける。

教育開発 授業に関する研究、実践、方法論など

教育活動 授業以外の実践活動、方法論など

調査・提言 授業、授業以外を問わず、教育に関する課題の提言など

第9条 研究資料集の報告は、別に定める「東海大学教育研究所論文・報告書執筆要綱」に従うものとする。この要綱に従わないものは、受理しない。

第10条 研究資料集の報告書は原則として、毎年10月31日に締め切り、翌年2月に発行する。

第11条 研究資料集に提出された報告書は、次の通り処理する。

- (1) 査読は行わないが、内容・読解性について編集委員会で審査する。
- (2) 審査の結果、基準を満たしていると判断された報告書は研究資料集に掲載する。また、満たしていないと判断された報告書に対しては、訂正ないしは却下を求める。

東海大学教育開発研究センター紀要・研究資料集執筆要項

改定 2016 年 4 月 1 日 制定

1. 論文の構成

紀要の論文（査読あり）、研究資料集の報告書（査読なし）は、以下の(1)～(5)から構成され、この順に記述するものとする。(5)の付録は必要がなければなくてもよい。

(1) 表題部

① 表題 ② 著者名 ③ 所属機関

を書く。

標題は一見してその内容が分かるよう工夫し、20 文字を超えないようにする。例えば、「～の研究 第 X 報」のような、一見してその内容を知ることが困難なものは避ける。連名の場合は、直接の担当者のみとし、謝辞で述べるのが適当と思われる人は極力避ける。また、各著者名と所属機関の対応を*印で明示する。

(2) 概要 (Abstract)

論文の概要 (20 行程度) を和文または英文で書く。

(3) 本文

文章は格調よりも、読者が容易に理解できるように配慮し、不必要に冗長な記述を避け、要点を的確に伝えられるように書く。また、内容の本筋が理解し易いように章、節、項を立て、以下のように通し番号と見出しを付け、順序立てて記述する。

1. はじめに (18 ポイント 太字 中央)
2. 章見出し (12 ポイント 太字 中央)
 - 2.1 節見出し (12 ポイント 太字 左端 数字半角)
 - 2.1.1 項見出し (12 ポイント 左端 数字半角)
 - 2.1.2 項見出し
 -
 2. 2 節見出し
 -
3. 章見出し
-

これ以上の小分割はできるだけ避け、さらに分割が必要な場合は、それ等の順序を示す数字や記号が、本文の中で用いる他の数字や記号と混同されないようにすること。また、本文は、はじめに（まえがき等も可）、本論（章を立て、章毎に適切な見出しをつける）、むすび（あとがき等も可）からなり、それぞれ、つぎの要領で作成する。

はじめに：

- ① その分野の関連する研究のこれまでの状況
- ② 研究の目的、意義、位置付け、範囲、対象など
- ③ 独創性、新規性、有用性などを主張する点など
- ④ 本文の構成、展開についてのガイドの記述を含み、論文のあらましを簡潔に示す。

本論：

研究の目的、対象、方法、成果などを明確に示し、それが客観的に確認できるように記述すること。また、その根拠を他の論文、図書などに求める場合は、文の右肩に文献の通し番号を明示して、引用文献に挙げる。

一般に慣用されない用語、専門の略語、本文中で使用する記号は、必ずその意味を説明して用いる。また、式は主題の論旨の展開に必要な程度に止め、特に長い式の誘導は必要ならば付録にする。結果を示す式は番号を付けて、その意味を解説した方が読者に理解され易い。

結果は、文章よりも図、写真、表の方が分かりやすい場合も多い。但し、同じことを図と表で二重に示したり、多数の同じ性質の図や表を挙げることを避ける。図、表は、図1、表1のように通し番号と名称を、それぞれの図の下、表の上に付ける。

手順やアルゴリズムを正確に示すのに、擬似言語やコンピュータ言語のプログラムが都合の良い場合もある。しかし、その場合にも必要最小限の部分に限り、プログラム全体を掲げることは避ける。プログラムは図扱いとする。

むすび：

- ① 研究目的に対する到達の程度
- ② 研究結果および成果のまとめ
- ③ 今後の課題
- ④ 謝辞（必要なら研究との関係を記し、できるだけ簡単にする）
の記述を含むこと。

（4）文献の引用・参考文献および補注・脚注について

※参考文献については、文末にまとめて掲載する。その際に、次の要領を守る。

①本文中に文献を引用する場合、著者名（姓）の直後に刊行年を添える。

例)

i) 「成川（2014）によれば…」, 「Narukawa（2014）は…」

ii) 「…という（森川, 2014）。」, 「…である（Morikawa, 2014）。」

②ここに掲げる文献は、原則として、公開されていて一般に入手可能であること。また、関係するからといって、本文で直接引用しない文献を挙げてはならない。

③引用された文献は文末に一括して示し、見出しは「参考文献」とする。

④日本語文献と外国語文献を分けず、著者名（姓）のアルファベット順に並べる。

⑤文献番号はつけない。

⑥表記が2行以上にわたる場合は、2行目以降を全角2文字（半角4文字）分字下げする。

⑦各文献は、著者名、刊行年次、表題の順とする。単行本の場合には、表題の後に版数、出版社名（外国の場合は出版地も記す）を記し、雑誌論文の場合には、表題の後に雑誌名、巻数、ページを記す。雑誌名は省略せずを書く。インターネット上の文献を参考にした場合には、DOI（Digital Object Identifier）または、URLを記入する。

⑧英語の引用文献の書き方は、基本的に APAVer.6 に準じる。

⑨補注をつけたい場合は、ページごとに脚注を入れることとする。脚注は、文字サイズを 10.5P とし、ページごとに通し番号をつけ、本文中には、それに対応する番号を文章の切れ目の右肩に記す。

（5）付録

論文の論旨を明確にする上で、特に長い式の誘導、詳細なデータや図面などは付録とする方がよい。また、記録として残す価値のある資料を含む。

2. 論文の作成

（1）全体の形式

論文の文章は口語文章体（である調）とし、出来るだけ新仮名使い、常用漢字、算用数字を用いて書く。句読点は「。」（句点）, 「,」（カンマ）, 「・」（中黒）を使用する。論文は Microsoft Office Word（2007 以降）を使用して以下の要領で作成する。なお、レイアウト等の詳細は原稿例を参照のこと。

① フォーマット B5 サイズ、専用電子フォーマットを使用

② 行数・文字数 1頁 42 文字×36 行、1段組

③ 字体・サイズ MS 明朝体 9pt（ポイント）英語：Century 9 pt

（2）頁毎の形式

第1頁は以下のもので構成される。

① 紀要名・巻・発行年 左上（東海大学教育開発研究センター紀要 No. X, 20XX または
東海大学教育開発研究センター 研究資料集 第X号 20XX 年）

② 論文種別

②-1. 紀要については，希望する種別を右上に記入する。

原 著 研究・開発の成果をまとめたもので，新規性，独創性，有用性，信頼性があり，学術
および教育の発展に役立つもの。

ノ ー ト 萌芽的研究，追試的研究，速報的なものなど。

②-2. 研究資料集については，希望する種別を右上に記入する。

教育開発 授業に関する研究，実践，方法論など

教育活動 授業以外の実践活動，方法論など

調査・提言 授業，授業以外を問わず，教育に関する課題の提言など

※研究資料集については，査読とは別に内容的に掲載の不可を編集担当が判断して通知する。

- ③ 表 題 中央揃え，18P
- ④ 著 者 中央揃え，14P
- ⑤ 所 属 中央揃え
- ⑥ 概要の見出し 中央揃え
- ⑦ 概 要 20 行以内で簡潔に書く

第2頁以降からは論文の本文と参考文献等を書く。

- ⑧ 章見出し 中央揃え
- ⑨ 節・項見出し 左寄せ
- ⑩ 図表，写真等 ワードプロの機能で文章中に配置
- ⑪ 引用文献見出し 中央揃え
- ⑫ 受理日（提出日） 右寄せ，最終行（研究資料集は不要）

(3) 論文の分量

紀要論文は，概要を除き，原著が 20,000 字程度（A4用紙 1頁 42 字×36 行で 13 頁），ノート
が 12,000 字程度（同 8 頁）を上限とする。また，研究資料集は，概要を除き，7,000 字～10,000 字程
度（同 5～7 頁）とする。

東海大学 教育開発研究センター紀要
電子版
第5号 2020

2021年3月31日 発行

発行者 成川 忠之
東海大学 教育開発研究センター
259-1292 神奈川県平塚市北金目四丁目1番1号
Tel. 0463-58-1211 (代表)

発行所 東海大学教育開発研究センター
259-1292 神奈川県平塚市北金目四丁目1番1号
Tel. 0463-58-1211 (代表)

THE BULLETIN OF CENTER FOR EDUCATIONAL RESEARCH AND DEVELOPMENT

TOKAI UNIVERSITY No.5 2020

CONTENTS

Note

Developing competency-based English programs: a cross-curricula perspective to teach writing in college

Mika ITO 1

Activity Report

Report on the Organization Activities by The Center for Educational Research and Development, Tokai University

Tadayuki NARUKAWA, Yoshimichi OIKAWA, Hiroomi BABA, Yoshio YASUMORI,
Yukiko SONODA, Hirohito HAYASHI, Naoya SATO, Takashi Matsumoto and Yoko HAYASHI 21
